田中真一
神戸大学

イタリア語の二重子音に対する日本語話者の促音知覚

本発表では、英語からの借用語に比して論じられることが少なく、英語と音韻構造の大きく異なるイタリア語の二重子音に対する日本語話者の促音知覚を分析し、促音の知覚と生起との関係を考察する。

促音知覚に関しては、Hirata(2007), 川越・荒井(2007), Otaka(2009)等の先行研究があり、それらにおいて、子音の持続時間だけでなく先行母音に対する子音長（Relative Duration of Vowel (RDV；C/V)、また、単語長に対する子音長（C/W）が知覚に関与することが指摘されている。

発表の前半では、イタリア語の二重子音／単子音を持つ刺激語に対する日本語話者の促音知覚と、上記観点との関係を検証する。そして、前者(C/V)が英語からの刺激と同様、促音知覚に少なからず影響を及ぼすのに対し、後者(C/W)はイタリア語の音節タイミングリズム、すなわち、音節数の多い語ほど持続時間が長いという性質上、英語のようには影響を及ぼさないことを報告する。

後半では、語末に近いほど促音が知覚・生起しやすいという、いわゆる「位置効果」（窪薗 2005）に着目し、その意味を考察する。前半で使用した刺激音から先行・後続音節を削除あるいは、音節挿入することによって子音位置を移動させた刺激音を作成し、それぞれに対する促音知覚を分析する。その上で、とくに母音・子音がともに大きく伸長するアクセント音節（イタリア語においては通常次語末、つまり、促音生起の最も語末に位置する）は、刺激語内の位置にかかわらず促音知覚率の高いことを示す。このことから、少なくともイタリア語における知覚上の位置効果が、アクセント音節という特別な音韻環境と一致したために生じることを報告する。

以上の分析を通して、原語と借用側の音韻構造の関係を整理し、日本語の促音生起を考察する。

参照文献

Hirata, Yukari (2007) Durational variability and invariance in Japanese stop quantity distribution: roles of adjacent vowels. *Journal of the Phonetic Society of Japan*. 11(1), 9-22.

川越いつえ・荒井雅子 (2007)「英語風音声における日本語話者の促音知覚」『音声研究』第 11 巻第 1 号, 23-34. 日本音声学会.

窪薗晴夫 (2005)「日本語音韻論に見られる非対称性」『音声研究』第 9 巻第 11 号, 5-19. 日本音声学会.

Otaka, Hiromi (2009) *Phonetics and Phonology of Moras, Feet, and Geminate Consonants in Japanese*. University Press of America.